

2000年代半ばから次世代シーケンシング(NGS)が普及し、90年代とは桁違いの手軽さでDNAデータを得られるようになった。それなりの研究費があれば、データも解析ソフトも手に入る時代だ。

だからこそ、データをいかに適切に整理・活用できるかが重要だと、日本DNAデータバンク(DDBJ)センター長を2012年から務める高木利久は指摘する。医学や農学への応用も現実的な課題となっている。データの管理は、従来の生物学研究の片手間

適切な整理・活用が課題

にできる仕事ではなくなってきた」と、高木は語る。

高木は1980年代に計算機科学分野からゲノム解析に飛び込み、2007年

から国内の生命科学系データベースの統合を図る事業を率いる。DDBJでは、

ヒトゲノムの研究用データを受け入れるために必要なセキュリティ強化やガイドライン整備も進

めてきた。「面倒で報われないが、

誰かがやらねばならない仕事」を引き受けてしまっているという。

近年、大学や公的研究所は生存競争にさらされてい

る。評価の対象となるのは、第一に論文や特許などの業績だ。それらの業績を支える立場にあるデータベース自体は評価の対象になりにくい。米国のデータベースを利用できるならば国内には必要ないとの意見すらある。

確かにインターネットがあれば、データベースは世界のどこかにあればいい。

「ただし」と高木は付け加えた。「生のデータを適切に扱える技術とノウハウを持つ人の集団が維持されなければ、日本の生命科学研

究はやせ細っていくことになるだろう」

(伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員)



5月、三島市で開かれたDDBJ30周年記念シンポジウムには高校生も多数参加した(DDBJ提供)